

正倉院宝物をみたイギリス王子たち

― 百四十年前の国際交流 ―

当館学芸部情報サービス室長 宮崎 幹子

当館学芸部専門職 堀内しきぶ

いまからおよそ百四十年前の明治十四年（一八八二）十一月、奈良を訪れたイギリス人がいた。アルバートとジョージ（のちのジョージ王五世）という二人の王子と、彼らの家庭教師である。一行は海軍の艦艇で世界を巡るなかで来日し、各地で多くの人と出会い、さまざまな文化に接した。王子たちが日本から持ち帰った古写真については、令和元年から二年（二〇一九〜二〇）に当館で開催した特別陳列で紹介したが、彼らは旅行記（*The Cruise of Her Majesty's Ship "Bacchante", 1879-1882, Macmillan, 1886*）も残している。私たちはいま、近代日本を活写したこの貴重な記録の翻訳に取り組んでいる。ここでは旅行記にもとづきながら、奈良での足跡の一端をたどってみたい。

王子たちは京都から奈良に入り、西洋建築の師範学校（明治十年（一八七七）に興福寺食堂跡に建てられた寧楽書院だらう）を宿舍とした。翌早朝から「非常に聡明な」興福寺貫首の案内で、五重塔、東金堂、南円堂、北円堂を順に参拝した。堂内の荘厳な仏像に驚き、神秘的な美しさや造形を称賛する一方で、八世紀から続く寺の歴史や、近年分離させられた神々と五つの本地仏（春日本地仏と思われる）、さらには途絶した塔頭から東金堂に集められていた破損仏についても記している。興福寺が廃寺を経て再興へと向かっていったころの臨場感が伝わってくる。

次に訪れたのは「帝の倉」、すなわち正倉院だ。「高さ八フィート（約二・四メートル）の柱に支えられた倉の三つの扉に、仮設の梯子をかけてなかへと入っていった。八世紀に遡る貴重な古美術コレクションは「最近整理が始められたばかり」で、箱や櫃には古物がいっぱい納められている。上階には「ガラスケース」に整理された品もある。王子たちの訪問の二年前、内務卿伊藤博文は宝庫のなかに陳列棚を設ける建議を出し、明治十三年（一八八〇）から翌年にかけて設置作業が行われた。王子たちは新設の棚に並べられた宝物をいちはやく拝観する機会を得たことになる。

一行は、ふたつの大きな銀の壺（銀壺、千年前のものといわれる緑の釉薬がかかった陶片（本当ならそうした品の製作年代の説がひっくり返るだろう）、日本にある最も古いガラス、信長も切り取った、よい香りがする長い切り株状のもの（黄熟香）など、



奈良へ来る直前に西本願寺で撮影された写真
アルバート王子（前列左から2人目）、小松宮彰仁親王
（同4人目）、ジョージ王子（同5人目）

Group portrait at Nishi Hongan-ji, Kyoto 5-6 Nov 1881
Royal Collection Trust /
© His Majesty King Charles III 2022

たくさん宝物をみた。それらの古さに感嘆し、学術的価値や希少性を讃えつつ、編年への関心を示したり、博物館の中核的な展示品になるだろう、と感想を述べている。彼らが今日の正倉院展の盛況を知ったら、予想に違わずと喜んだらうか。

宝庫を後にした王子たちは、東大寺大仏殿へと歩を進める。仰ぎみるほどに巨大な大仏を堪能し、「古い銅像やその他の古美術品の展示館となっている」仮設小屋でも宝物類を鑑賞した。明治八年（一八七五）四月から六月にかけて、大仏殿回廊

を会場として第一次奈良博覧会が開催され、十四年三月から五月には第六次が開かれている。王子たちの訪問は博覧会の会期中ではなかったが、出陳品の一部は引き続き東大寺にとどめ置かれていたと思われる。

そして巨大な杉木立と灯籠のなかを進んで春日大社本殿と若宮神社に参詣し、神楽殿では藤と椿の髪飾りをつけて正装した娘たちの優美な舞を楽しんだ。彼らは人力車に乗り込み、行程はさらに法隆寺へと続いてゆく。

旅行記には、王子たちが実見したものについて、大きさを添えつつ丁寧な描写が残される。驚かされるのは、宝物類のみならずその背景にある歴史や信仰についても、深い洞察力と敬意をもって接し、詳しく記録していることだ。折に触れ、西洋の宗教や古代史との比較をおこなって日本との共通点や相違点を見出し、そこから更に理解を深めようと努めている。記述の正確さから、日本側には案内や通訳を担当した優れた人たちがいたことも想像される。

旅行記の存在と、そこから追体験できる彼らの滞在は、古都に息づく文化を通して国境を超えた交流が確かにあったことをいまに伝えてくれる。現代よりも移動が格段に困難であった時代に、豊かな交流を成し得た先人たちの熱意を感じたのだ。